



博士課程に進んで

島根大学生物資源科学部の鈴木美成先生からバトンを引き継ぎました中央大学理工学部の中澤 隆です。私が日本分析化学会の会員になったのは2007年度からで、その当時私は山口東京理科大学の菊地 正先生の下、研究に励んでいました。日本分析化学会の学生会員になったというだけで、私は科学者の仲間入りをした気になり、非常にわくわくしたのを覚えています。学会の会員になると毎月「ぶんせき」誌が送られてきて、入門講座では基礎的な知識を勉強し、その他の記事についても通読し、分析化学の面白さ、奥の深さを学びました。2008年からはリレーエッセイが始まり、毎回楽しく拝読していました。今回、鈴木先生からリレーエッセイのご依頼がありました。今まで続いてきたリレーエッセイの執筆者のつながりが、一読者であった私にまでつながってくるという、日本分析化学会の人脈の濃さに驚きつつ、非常に光栄に思い、お引き受けさせていただきました。

さて、エッセイを引き受けたものの、何かネタになるものはないかと探していましたが、なかなか考えがまとまらず、博士課程に進んでというタイトルで書き出してみました。というのも、この原稿は学位を取得してから数ヶ月しか経っていない時期に書いていますので、学位取得を志していた気持ちを忘れない今のうちに「ぶんせき」誌を読んでいる学生に向けて思いつくことを書いていこうと思います。

まず、研究室に配属された当初の気持ちを思い出してみてください。これから始まる研究生生活に心をときめかせ、自分が行う研究で大発見をしてやろうというぐらいの気概を持っていたのではないのでしょうか。それが、大学院入試や就職活動がひと段落し、研究室での生活にも慣れてきたころ、どのように変わっているでしょう。内定を頂いた学生たちの多くは、卒業・修士論文を書くために（大学を卒業・修了するために）実験を行っているのではと危惧しています。研究本来の目的である、今まで誰も知らなかったことを明らかにするという意気込みは、いつしか単位取得のための作業になっていませんか。理科が好きで理系の大学に進学し、知的好奇心を満足させただけで大学を去って行ってしまうのは、寂しく思います。もっと手を動かし実験をして、得られた結果を見て考え、心が震える瞬間を感じてみてください。その感覚を一度でも味わってしまったら、しめたものです。次第に研究にのめり込んでいくことでしょう。そして気づくはずです。研究が楽しいということに。

修士課程1年の学生は、ちょうどこのエッセイが発

行される11月ぐらいが進路を決める時期ではないでしょうか。すなわち、就職か博士課程へ進学かです。博士課程への進学を考えるにしても、学生の皆さんが気にしていることはやはり、学位取得後の進路のことではないでしょうか。博士課程へ進むと、専門分野が狭まり、その結果として就職先も少なくなるとよく聞きます。私からすると、そんなことは全然ありませんでした。私が思うに博士課程とは、研究をしつつ専門知識を学び、広い視野で物事を考え、それを発信する一連の過程を訓練するところです。博士課程で得た知識や経験を、様々な分野で発揮していこうと思えば、就職先はたくさんあります。実際に私は、博士課程では蛍光X線分析を専門にしていますが、就職先はプラズマ分光分析を主としています。しかし、博士課程で鍛えた物事の考え方の一連の流れが、今も役に立っています。博士課程に進みたいけど、自分が博士課程に向いているのかどうかかわからない、という人もいるでしょう。私は博士課程には向き不向きは関係なく、やるかやらないかだけだと思います。好きならやれるし、嫌いなならやらない、とても簡単なことです。私が博士課程を修了できたのも、研究が好きだったからです。少なくとも私が博士課程へ進むにあたって、就職のことは全く考えていませんでした。実験が楽しくて、もっと研究がしたいと思い、博士課程に進学しました。就職することも重要ですが、若い時にはもっと研究に打ち込んでみてはいかがでしょう。

今、私が博士課程に進んでよかったと思うことは、博士課程で行った一連の研究成果を博士論文としてまとめられたことです。その中で謝辞を書いていたとき、研究にかかわってきたたくさんの方の顔が思い浮かびました。決して私一人だけの力で博士論文が完成したのではなく、多くの人の支えがあって博士論文が書きあがり、博士号の取得につながったと感じました。長い間の学生生活において知り合った様々な人との人脈のつながりを築けたことが今後の財産となり、また、このエッセイの依頼も舞い込んできたのだと思います。

今回のエッセイは（公財）地球環境産業技術研究機構の中野和彦様にお願いました。私がバトンを受け取ったとき、次のエッセイを依頼するならこの人しかいないと、エッセイの打診をしたところ、快くお引き受け下さいました。前職の高輝度光科学研究センターから転職される時期であったにもかかわらず、原稿の執筆を引き受けて下さったことをこの場をお借りして感謝申し上げます。

〔中央大学理工学部 中澤 隆〕